へ8
4350

早稲田文庫

コレダケ傍書ク。余白アケて置く。

黒光

特
へ8
4350

昭和十年五月二十九日
購求

コレダケ儀ヲ書ク。余白アケテ置ク。

黒光

江見水蔭

序幕

「一」 八幡岬

◎時 ―春の日（午後四時頃）

◎處 ―上総八幡岬、遊園地

◎舞臺

◎人物

笠原博士夫人 雪江（三十五才）

同 令嬢 富佐子（十八才）

漁師の娘 お紺（花七）

お紺の母 お絹（四十才）

漁師の娘 お貝

同 お岩

別荘の令嬢 秀子

同 柳子

同 金子

同 清子

銀行の[illegible]衛（五十才）

壮士 草野剛平（三十才）

文士 深瀬繁三（二十才）

新聞記者 … 同 … 女中 お鳴

上手下手、岩組。正面太平洋を見る背景。（喜地より眼下は）

棒杭に針金を引きて欄干として、[illegible]、捨石等ある。[illegible]あるべし。

五サゲ 大漁節にて幕明く。

「唄」

上げとせ、一本[illegible]の[illegible]、この[illegible]。

（一番[illegible]で[illegible]、心は[illegible]と[illegible]。）

漁師の娘お貝、お岩、秀子、柳子、金子、清子の[illegible]を[illegible]へ[illegible]入る。

昭和十年五月二十九日 購求

五字五

君子踊る。
傍のベンチに、避暑客夫人雪江、同令嬢富佐子、見物して居る。其の後に漁師の娘お紺、立って居る。他のベンチに、漁律男爵夫人、息藤丸の同女中お嶋、腰掛けて見物して居る。

お貝「いかゞ[redacted]で御在ますか。よく覚えられて？
姉え頃だがホア」
お山君「一寸だけ覚えれば、後は皆んな同じ[redacted]よ」
光代「覚えられれば様に、覚えられない様な、何んだか音楽のねえ」
柳子「頭る単純なんですが、間が伸びたり縮んだり、ねえ」
金子「機械の道の子のような様ですわ」
信子「南洋の土人踊めいて来ましたよ」
お貝「さ（ろ）悪口仰っしゃると、上総小濱の大漁節、どんなだか、帰って知れませんぞ」
お君「さア、[redacted]言の、景気よく、トッケエ
べエを教えて下さえ」
秀子「ある、チーキオーリを景気好くやって」
柳子「ダンスを踊るのは、鎌で絲よかよっと[redacted]」
お貝「さア、もう一度、始ござんすか」
（唄）「ニツとせ、二ツ並べれば花、どちらがいいか、いろ」
「三ツ…、皆も出て見ろ様じるし、かけ声…は」
五
一下踊りの半ば、上手の方より…

ト船入の声。

金子曰 おや／＼、漁船が帰つて来た様ですわ

満子曰 あッ、船を立てゝ居ますよ

お貝曰 ヤア、船が着いちやア踊りどころぢやアねえ

お光曰 荷揚げの手伝ひに行かざアなんねえ

香子曰 わたし達もお魚を陸へ上げるのを見に行きませう

ゆき曰 然う／＼、行きませう

(娘) 曰 四ツとも、四つや五つの雑魚が、鉄金言葉まで

5 ト踊りの六人（上手へ）入る。

菜丸曰 僕も生きた魚を見に行かうや

5 ト菜丸立上る。

お嶋曰 お危ないですよ、崖がくづれ掛つて居ますから、坊ちやん、へ／＼とおばさんが心配さいますよ

5 ト続いて立つ。

菜丸曰 ふアに大丈夫だよ 鉱足、おいッ！

5 ト菜丸は、玩具の軍刀を抜き、突貫する如く上手に走り入る。お嶋は捨台詞を給ひ乍ら入る。

雪江曰 何んの船が着いたのかしらねえ

お紺曰 大方鮪でも獲れたのでせうよ

雪江曰 紺ちやん家へ来て居て（あけぬば）、（手伝ひ）早速に行くのがよくねえ

お紺曰 えゝ、鮪でも鯨でも何んでも引擔いで、汽車の時間に間に合ふ様に、停車場へ駈付けるんだから

それは丸で戦争見たいな様で、面白かったですよ
雪江「此辺の女の人は、皆強いわねえ
お紺「ですから東京へ奉公に出ても、傍で働く者が、
力は入るあくいって [redacted] 云ひますよ
富佐子「母様(かアさま)もさ、幸ひ、（鯨の）お刺身を見に行きませうよ
お紺「あら、あたしがお刺身 [redacted] 掛って居ませんの
雪江「這入んなさいで（ト手に合図）よ ト言ひけるのが勝って形を示す。
富佐子「だってア早く、さア行きませうよ
雪江「爸いたら妻が手を引いて行きませう
お紺「帆待(まち)千館の手を持けると近う御座います
5ト三人揺蔑、詞にて上手に入る。
下手より、お紺の母お鐘、小包を持ちて
（描巻、単衣、草履穿き、どちらか大漁祝の古いのを三尺をしめ。）
お鐘「お紺や……、今其処に見えて居たが、何方へ
嬶さん入らっしゃいってかせう
5ト上手を行掛る。
待ってよ、銀兵衛（酔ってふらふら）が来る。
銀兵衛「おいッ、お鐘さん、一寸待ちねえ、用が有るんだ
お鐘「あたしに用が有るんですか [redacted]
5ト行掛るを、呼返して。
銀兵衛「世間はお前、（逃げる）ってえもんだ [redacted] 網の目へ首を
実(じつ)んとこ同然だア、ジタバタするだけ [redacted] エラが喰込まア
5ト お鐘を捕へ、センチへ勝そ
掛けよってから。
お鐘「銀兵衛さん、大層御機嫌のようだねえ
5ト逃腰いのを避ける。

6

銀次郎　いや、ちいと気持が（大不機嫌だ。）

[redacted]

俺ははいあんべえに、笠原京橋の料理屋へ住込んで、爺やくとする婆からも離れて居たものを、お前のお絹の嫁を、あの内へはめこみやがって、ぼんやりで、俺の幸を酒の上がれくの、女子掛けちゃア油断がならねえのと、さんぐ難癖をつけ上で、剣頭しくじらしてそれだけじゃアねえか。幸運を逃りまた後へ、お絹の嫁を入れたアほいが、追出された俺は何処へ行くよ。この歳になって極道者で、宿屋料理屋を追ん出されちゃア。今更えの何処へ行くんだ。俺を今日から一人ぐらしだ。幸ひお前は一人ぐらしだ。どうぞ、お前の所で暮らしてくんねえ……ど、

お絹　母ア蔵云ってはいけなくよ。お前が笠原京橋を、しくじったのは、女ばかりのお上がいつまでも、それをひがんで、

ない気まぐれ、気味の悪い事を（旦那様方、俺様で、俺には怖ろしい）者が来てそれで言って、追っ払ひだ。

銀次郎　（肝腎）かんじんの料理番が、気持はお嬢様を寄付かせるからがあるのか

お絹　というのも、今では、俺に芸者気が有って一軒を打つれのが悪かったのだ。

銀次郎　それを、笠原さんでは、まア、当分はコソコソと、はめでたいの強いのがはいと、今度は

お絹　お絹が亭見せして、のろまのそ、かれしの方から、お頼みして、入れて頂いたのは、ふいのだよ。

6

銀造　然う云はれゝば、そんなもんだが、話を今めかし（似合の年頃で三人が）
二十年も前にお前と引分れたと、お前と俺とは
（とうとう）ちょうど好いと思って居たんだ。

お種　お前だけ思って居たんだらう。

銀造　[redacted]そいつが　お前は
東京へ奉公に出て、帰って来た時には嫁に子
が有[redacted]んだ。それの俺が知らねえが、お紺の姉

富　お梅産んだの[redacted]、俺アがっかりしちまったのよ。

お種　二十[redacted]年も前の話を、今時されては困ります。
ゆるし　は　男[redacted]国が有るんですか
後の話は、一昨日おいでよ。
ふ……

ト立ってお種は上手に行き掛けて、もしや
又下手を見て、かと来て下手に入る。

銀兵衛　おい、お種さん、まだ大事な話が有るんだ。

ト追ひかけて下手に入る。

鈴の音の太鼓遠く聞える。
上手より富佐子先きに双眼鏡を持ち
綴りながらお紺、小さな洋傘を
持ちて来り。

お紺　お嬢様、何方へ貴女入らっしゃるんですか。

富佐子　だって蒸汽船が帰ったって、お前ではつまらないわ。
それよりお嬢様、アメリカから帰りなさる

お紺　蒸汽船が、これで見たいわ。

ト双眼鏡で海の方を見る。

お紺　ですから旦那様のお帰りは急な事では
ないさうですから、いくら御待ち遊ばしても見えるものですか
こッちゃア御勝手で待ってゐますよ
富佐　何様早く帰るやうに……
あたし、待遠しくって／＼、仕様がないのよ
5　ト打しおれる。
お紺　然うして御待ち遊ばせ。阿父様のお帰りが、意外
は御楽しみを御待ち遊ばせねえ
5　ト　こちらも打しおれる。
富佐　楽しみよ
お紺　あちらの阿父様は、いくらお待ちなさっても……お待田様が御在ますわ。
お土産をドッサリ持って
帰って来やうとするのは難しいわ
お前の親は、いくら待っても、帰って来ますが……富佐の阿父
富佐　それでは死んだの？
お紺　いいえ
富佐　此処の彼の……
お紺　神様から無いので御座いますの
富佐　然う。阿父様の全く無い子が有るわねえ
お紺　上総の小湊は、日本一良い処で、海の中で桜が咲きますよ。誕生寺の間から、紺は生れたので御座います
富佐　岩の中から産れたの？
お紺　桃の中から産れますもの
富佐　あら可笑しい事ねえ
お紺　可笑しい事は有りませんよ

ト（お紺オバしなど）八幡社の鈴にを鳴らす音。

女郎へ 下手より お種 出て来て。

[redacted]

お種　あッ、（お嬢様……がくお紺）民郎さに居れのか

お紺　あい、おッかア待って居れアよ

ト　思ひはずみ中屋敷が出る。

お種　汚れ仏さまをして居るのをごらんなさい　キタナイ言葉をを宮ふしんん

お紺　なアに [redacted] だやア有りませんわ

知れでは減奇をせけねえが、高（れいこ）な様かく、[redacted] 笑はれるまで。おッかアと

許しまするは、元のまゝが何りが早いよ

お種　[redacted] 元は（それが済子の…）[redacted]る イケませんよ
ト二人ベンチに腰掛ける

お紺　着替を早く届けて頂戴それ [redacted] は　あいおッ母ア

困ってゐるのだよ

お種　この着物　今日は持って来たが……まア　女（さま）

ぱぬ何しに来れのです

ト　お紺の気持ちに気づく。

お紺　男様の（まだ新しいの）を直して下さつれのですよ

お種　まア　結構な……（何んといふおやさしい内さん様い……）それを　ふだんに着ては

仕様が有りませんよ

お紺　だから早く　着替を　持って来て [redacted] と、あんまり（すべて甘…こましゃ）

催促しれおやッぱいか

ト　……れる様子　小包をを取る

廿時間　当佐は　眼鏡で海の方を見て居る。

お種　それで男様は　何方に……居るの

お紺　今、鯖の……を見て居るッしゃるが……　阿母さん

いえね、奥様から お話が有るんだらうが、わたしを東京へ連れて行[redacted]くれて…… 正

お種 曰 東京へ…… お前、それで、行く気なの 正

お紺 曰 誰だッて 東京へ行きたいわね。阿母さんだッて 若い時ァ、東京へ行つて居たわねえ 正

お種 曰 その東京をさ、（5ト思入して）どんな好い処と思つて居るんだえ 正

お紺 曰 どんなッて 日本中で一番好い処と思つてるわ。（此間お宮仇子は下手の方へ入る。）今晩 皆様から お話を聞くと、行つて見たくッて 仕様が無いよ。それでね、わたし東京へ連れてッて下さッてからさ、今迄での倍の倍働いて、水も汲みませう、薪も割りませう、朝から晩まで ハダシで飛ッ跳んで歩きますッてからさ。ハダシは罰金で いけないぞ。水も汲まなくッてそ、水道が有るし、薪も割らなくッていいぞ、瓦斯が有るんだッてえ、重宝だねえ。おッたまげだぜ、あきれる 正

お種 曰 おやア お前の方から 連れて行つて 頂く様に お頼みしたんでせう 正

お紺 曰 なアに、然うぢやアないんだよ、奥様が是非東京を見せると御有るんだよ。ねえ 阿母さん、行つても好かろ、好かろ、好いと言つてお呉れなねえ 正

5ト（お紺は無邪気な母の）膝の手を掴んでゆすぶる。お種は目をつぶッて、ぢッと考へて。

お種 曰 東京と云ふ処は、話に聞いて居れば、まことに結構な処だが、自分が行つて見れば、さも悲しい処です、厭な処です、[redacted]わたしなんぞは、もう〳〵、二度とふたゝび行く処ではないと、然う極めて居るんですよ 正

お紺 曰 何の好いだらう。東京を悪くいふ人は、阿母さん一人だねえ 正

お種 曰 わたし一人かも知れないよ、本統の東京を知つて居るのは…… 正

お紺 曰 おやア 遣つて呉れないの 正

5ト むッとしていふ。

お絹「やっぱりお母さんが、能く考へて行って
お絹「それ、わたしが何んだか手本だからね」
お絹「阿母さんがお手本？……」
お種「え、え、それは、その、つまらなく東京から帰って来れ
からねえ」

ト言淀みます。
お絹も思入あって

お絹「阿母さん、それだよ、わたしも既う十七だよ。
もう聞かしても好い。ちッせえ内すは人間は、
両親チャンと揃つたのもあり、親めッかちもあり、親はありのもある。
わたしのは阿母さんばかりだと思つて、阿父の無いのを
不思議とも思はなかつたが、段々大きく成つて見ると、
それでは如何も済まないわよ。人に聞かれると仕方が
ないから、詳しい事の間から亡くなれたんで、自慢くなれば
居なかつたけれど、面目無いわよ。これでも
お前は聞かれると、子供がちんぷんを云んで、一代つたが、
もうわたしも子供ぢゃアないよ。入つた訳がある
のなら、もう訳しても好いかんべえなア」

ト泣く。

お種「、生中気が好いだらうと、伏せるだけ伏せて
居れが、潮の上ツのと云ふ様では、ある程ふせぎゆかれ易く
首尾。お前が東京へ行きたいと云ふのなら、それでは
詫してきかしますが、お前の親に当る人は、東京の或る華族
様……」

ト言ひつゝ、田舎言葉を飲みます。

お絹「えッ華族！」

ト思はれて来る。お種は手をて顔しつゝ。

お種 諦めのある若殿様にお仕へ申す内、つい若様のおに
みのぼせて、咲き喜んで男爵さんに成れる様な、[redacted] 姿を見て居る内、れつきとした身と
成つたのだよ。すると若様は、此事が今世間へ知れては、
自分の名誉に関するから、どんな荒い事をしても好い
お腹を早く小さくしろと、恐ろしい事を仰有つ
たが、これが下々なら、そんな罪を犯さないでも隠
せないが、身分のあるお方で無法な御さしづ……
それはよく聞いてやつて、あちこちの御名誉の為
と思つて、わたくしは国へ帰りまして秘密に産んで
しまひました。其かはり、あなたが世をお憚りなさいましては
どうかよろしい様にお頼ひ申しますと、詫く申しあげて
裏落したのが、お前さんだよ。そんな者は[redacted]てろと
お紺 まアおつかア わたしがお腹は痛めた
[redacted] 若様とやらが云つたんだね

お種 其後若様は御結婚なさる。御婦人は男爵のお嬢様を御迎へ
はお生まれ[redacted] 奥様もお生まれなさらず……、それのは、われ
のお方へは何人のおれよりも[redacted]のです。こちらから
何度手紙をさし上げても返事は無し、出かけて
行くのも気を揉むが、ゆすりかたりと思はれるのも
口惜しいし、もうそんな[redacted]つれない御方なら
大事な娘を見せまい、おやアないと今日まで あなたは
唯一人で……お前をそだてゝ来たんですよ
お紺 そんな薄情な人間は なるたけ小さくて、一人もないわねえ

(13)

お絹 「だから東京はこはいのだよ。自分の名誉を保ちたさに、弱い女に罪を背負はして、知らない顔はあんまりだよ。義理の強い女ならば、お屋敷へ嫁入りせんでおくれだらうが、あの女は思ひ込んだのだからね、男といふ人間が恐ろしくて、独身でこれまで、お前一人を力にして居るんだよ。それだから、あれを振捨て、東京へとさわぐのだからよ。あれは母親は心細いよ。」

(14)

お絹 「[redacted]捨てて行きはしないよ。好いわ。そう東京へなんて行くもんか。」
なんぞ……なんぞ、一人の華族の親……
[redacted]
誰が東京へ……行くもんか……
よ……帝劇だって……行くもんか。
なんぞ……三越だって見物されてはない。
だって、勝手にわかり[redacted]よ……上野だって向島
[redacted]れだ、わしが行か
帰えとならし
お絹 「だから、行くのは行っても嬉いのだが、気をつけて行く[redacted]」
(ト先程東京へ行きさうな様子。)
お絹 「様はねえ。」
お絹 「わしが行かねえでも、お嬢様が……お早う！」
（ト心づき。）
お絹 「お嬢様は何処へ行かれたか。」
お絹 「あッ、つい今生所に居るッしゃるが……」
お絹 「嫁御でも有っては不孝だ。」
お絹 「お探し申さふくらちゃア居りませんか。」
お絹 「お嬢様！お嬢様！」
（ト、お絹、お絹、探しまはり下手に入る。）

15

ト 浪の音。
上手より雪江、心配しながら出て来る。後より草郎 [redacted] 剛平、見え隠れに附いて来る。（帽子眼鏡 洋服なるべく カスリの単衣はおかしい）

雪江 何処へ富佐子さんは行つたのでせう。……富佐子さん！ 富佐子さん！ 山
お紺が附いてるから大丈夫とは思ふが……

ト 後より剛平、突然と出て。

剛平 その富佐子さんは、崖から落ちて、大怪我をされましたぞ 山

雪江 ええッ 山

ト 驚く。

剛平 それは嘘です、御安心なさい。然し方々で僕のことを探んで居られます 山

雪江 あッ、左様ですか 山

ト 気味悪がり乍ら行かうとする。

剛平 奥さん、そんなに逃げなくッてもいゝでせう。旧友の僕をお忘れになりましたか 山

雪江 旧友？ 何方でしたかしら…… 山

剛平 トボケては不可ません。鮫島時雄ですよ、僕で すよ 山

ト 帽子を脱ぐ。
雪江はそれでも思ひ出せませぬ。

雪江 妾は如何も御見掛け申さない様ですが……
は（人違ひ [redacted] されくゝを）してゐらつしやるんでせう 山

剛平　人違ひぢやア有りません、あなたが僕を忘れ
ちつても、僕はあなたを忘れんです。

雪江　何んとあなたが仰有つても、わたくしは記憶
致さないのです。

剛平　ぢやア、あなたに思ひ出させる様に、少しく過去
を語りませう。お掛けなさい、僕も掛けます。

ト無理にベンチに掛けさせて自分も掛
ける

剛平　ねえ黒さん、あなたは今では笠原博士の夫人
と成つて、結構な御身分だ。僕は依然たる旅浪生活
旧猪六、[illegible]郎日は非ふりでねえ、操七が外遊中、[illegible]前荘で
暮して居りますが、帰朝しては、さぞおさびしいでせう。僕も京
さびしいです、遊びに伺ひますよ。

雪江　此の方もわたくしは笠原の妻ですが……どうも
あなたは人違ひして居らつしやる様に存じます。

剛平　いや、僕は今、違んな風をして居りますが、昔では
胸にダイヤ[redacted]をさして、ボアーの襟巻を立て
もあるんです。今の襟カラは巴里から御ざるさ。
或時は、ハイカラ風をやります
草部剛平……

雪江　草部剛平……と仰有るんですね
たよ

剛平　今は笠原博士の夫人……元は築地萊直亭の
女給仕、雪江さんの持つて居たスープは別として
[redacted]熱いのかといふ評判だつたです。それを京
皆く味はつたのが笠原博士で、僕は常にコールミー
トの皿をあてがはれたです。ホーリをくはへて、
幾度嗜嘆したか知れんですよ。

雪江　藤葉真一田女給使……然うね、時代

[redacted]

とふく入るつしやる方のお顔は一寸覚えません

剛平　では、あなたは（博士の事は）ちつとも（知らない）

とおつしやるのですか。

雪江　博士さんとかおつしやるのは知りません。然し（遠くから）時々は見かけた

居あい芸者の奥へ行つて、僕と遠慮なく話して居られました。

かへつて、僕と追懐談をして居られませんか。

その方の事は何にも知らないで居ります。

雪江　あの方は先生のお友達です。全く知れなくても覚えのあるかたです。万一おぼえが有つても、そんな事へ、何でも申し上げる事は出来ません。

（ト　障子を立つて行きかける。）

剛平　お待ちなさい、実は秘密の話が有るんです。

雪江　知りません。（結構です！）

（ト　実顔して）

雪江　何い加減なことを、おつしやい。

（ト　息をついで下手に入る。剛平は、気味の悪い着物を落して行く。）

剛平　（追はうとして、それを踏み、心づきて）拾ひ上げ。

剛平　文子　これを拾へば、それを知らないのか。一二度、（自分を信じて）居るのが、当然だ、それが主人の記憶して居るかも知れない。先刻の事を言ひ切りまして、いくらか小遣を貰ふつもりか、書き切して成功しないものだ。オッホッホッ

（ト　下手へ上手より　女中里恵登場。）

（八字詰　紙の手紙、落ちかけると）

18

繁三　[redacted]こす見えんです[redacted]が、君はあの夫人

周平　あッ……見えて居たかね　正

繁三　ひどく[redacted]動揺して居た様ですね。じんぶ波瀾が有つたのをな　正

周平　これは却てこみ入つた事情が有るんだ[redacted]
聞いてくれるのなら腰を掛け給へ　正

繁三　腰を[redacted]据えてゆつくり聴[redacted]　正

周平　あの夫人は僕の情人だつたのさ　正

ト話しかける。

…の…明暮。

（ズット下る）

松道　…松原

の間より、日本海を見晴る背景幕。
下手寄り燈台ところ。
松の木、捨石などあり。

浪の音。

島子、洋傘をさして居る。松の木まま
以前より上手より出て来る。

お鶴　…お伺ひ致しますが、こちらへ七八歳の坊
島子　いゝえ、見えませんでした。
お鶴　あッ、左様ですか、難有う。
ト行きかゝる。
島子　一寸まて
お鶴　はい　正

序幕

二 壇田の松原

◎ 場 壇田の松原。（午後五時頃）

◎ 人物 笹原高子（十九才）（博士夫人）

若山芳郎（三十才）

深瀬銀三（…）

女中 お嶋（…）

女中 お紺（…）

◎ 舞台は、上手、下手、松林の正面松原の間より、日花浦を見せる背景幕。舞台ところ下手寄り漁納屋。松の立木、捨石などあり。

浪の音。

高子、洋傘をさし、松の立木に凭れて居る。下手より、お嶋、走り出てくる。

お嶋 もし、奥様、お待ち申しましたが、さっきから七八歳の坊ちゃんが、お刀を持って居りましたが……

高子 いいえ、見えませんでしたよ。

お嶋 あゝ左様ですか。難有う存じます。

高子 一寸お待ち。

お嶋 はい。

喜子曰 （あの小屋の町の方から、）綺麗な、優しい、若い方

が、（お前へ）ぶッしつけなるを見ず知らずへ申上げかね曰

お峰曰 あッ それはまア、此方へお見えをせうの方は

身ぐるみへでなすったか、新橋で此方へ参つれの

ですか…… 芸者様は、どちらへ入らッしやい

それでは……曰

ト急いで下手へ入る。

喜子曰 あの方も急ぐ……の女は

動揺もなさらんで、気楽ないわ曰

ト云ひつゝ、名刺は接吻して懐中

に納める。

上手より繁三出で来る。

これを迎へて（喜子）握手の礼をする。

喜子曰 あなた なんかは手間取つてゐたのは どの

位此所に待つて居たか知れやせんよ曰

繁三曰 面白い話を聴いて居ればなんですもの曰

喜子曰 誰とどんな面白い話……曰

繁三曰 此頃此方へ来て、文芸の研究とかをすると

自称してゐる、妹のお七の男が有りませう曰

喜子曰 はア あの気味の悪い曰

繁三曰 あれが非常な艶福家だから 妹ではは有り

さうかいな曰

喜子曰 へえ……曰

繁三曰 しかも最近……最近最近、つい今の先で

すな、八幡神の見晴しでその情人とめぐり合つたん

二

…だそうです」

喜子「まア　本統！　空気の研究家の　詩人　あこがれ　魂がフワ／＼として、
お尻の軽い女でせうが、一体どんな詩人ですか」
繁三「身分は有るですが、　二人の　継子を持つて居る人です」
喜子「えッ　昔は西洋皿を持つた人？」
昔は西洋皿を持つた人です」

[redacted]

喜子「おッわかりました。その女は、わたし達の神聖な友情を誤解して、あなたとわたしとを傘にせようとする邪魔なかりして居る……」
繁三「能くわかりました、その夫人　それでせう　あなたの想像は大変な誤解です」
喜子「研究家と……まア　あきれますねえ、良人の洋行中にこんな不謹慎な妻が有るでせうか。それで夫を監督する資格が有るでせうか。若い男女が二人きりで静寒なんどしては、いけないでせう……

繁三「[redacted] 芸を忘れないで、二人で話しはかりなさい　あまりいいでせうが、しろ……だと云つて、[redacted] 中年に成ると　それで悩いの手紙の結系編のゆ着　くの見ない若様へ入つて、でせうか」

も、ミカも、[redacted] 貧乏の人つて居れますか、夫人は手放しされさうです」

喜子「まア　それが本統でせうか」
繁三「わたしも初めは疑つてゐましたが、気を押しても聞かれませんので。ところが、論より証拠と云つて、其の手紙を出して見せました。それが則ち其の手紙です」
喜子「まア　驚きましたわ」

ト言つてゆ着を出して見せる。

繁三　あゝ――驚く事が有りますが……[illegible]あちらへ行つて
話しません、此所では一寸都合が悪いですから……

富子　それでは、此の家にとつて大事件ですから、何処までゞも
参ります、是非聞かして頂きませう

繁三　あちらの●松林の中が好いでせう

富子　(納屋の)隣の人の処へ参りませう

ト二人下手へ入る。

浪の音はげしく聞ゆ。

上手より葉丸と富佐子、手をしばられ、猿ぐつわをはめられたる儘、(逃げ)て来る。後より銀兵衛、(双眼鏡)葉丸の帽子と(仮面の)刀の身と富佐子の(鞄)をさげ、片手に引抜へ追うて出で。

銀兵衛　えッ此所まで運んで(来ぼ)、逃げられて如何なるもんか
止

ト追ひ付け一人を押へると一人が逃げる一人を捕へると一人がと云ふ風なので(銀兵衛)用心の品物を振つて両手で二人を取つて押へ。

銀兵衛　お前等は逃げ様とすりや[illegible]生きてる事なんざ取人は無えんだ。
お前等を殺しはしねえよ、然うすると面白い処へ連れて行つ
[illegible]てこずらせやがるから、(縛)つて黙つて居るかもしれないぜ

ト云つても二人とも逃げ様として暴れる。

銀兵衛、困つた

銀兵衛　えッ仕方がねえ、手を借りに行つて来るまでは……

ト漁納屋へつれて

銀兵衛　此中へずつと入れて置かうよ

ト二人を引立て漁納屋の中へ入る。

上手よりお紺[redacted]人を探す心でさまよふ。

[redacted]の眼鏡[redacted]る心づきて面上げて不審の思入れ。

銀兵衛、漢納金より出来て、お紺の居るを心づき、びっくりして帽子と手刀とを取らば後ずる陰す。

お紺　あッ、銀兵衛さん、お前はん知らないかえ

銀兵衛　知らねえ

お紺　おらあたび行んまま

銀兵衛　や、お前さんはうちみが有るんだ、何を聞くんでも答へる

聞ひは仕ないよ

お紺　なんか

お紺　そんな事を云はないで……此近所で

めがねが落ちて居る……此近所で教へてお足んよ此所でお懐様をさん

銀兵衛　ほくッて？

み見ねえ様である、おれは太ふの停車場の方で見た様な有るが、おれ此頃モーロクしたんで

お紺　わすれッちまッたア　はアはアはア

おやッ　小さな足跡が濡[redacted]……

ト水の上を見る。

銀兵衛、後つけて[redacted]消す心で足跡を踏

お紺は足跡をさがし出して漢納金に入る

す。

銀兵衛[redacted]うとする。入る。新しきをふさがりる。

銀兵衛　さい、何するんだ

お紺　何んまもまあ、漢納金を探してるの[redacted]

銀兵衛　探しなッて居るんだ、俺が今ここで網をおって居たん

お紺　だが……

だから、いよいよ探してゐるのよ

六

銀公「えいッ、そんな事を言やアがると、如何しれッそ中へは入れられねえや」

お紺「だッて[redacted]此所は、お前の家ぢやア有るめえし」

銀公「入山方の廉納屋だが、おれが今日から（あづかつてんだ。）イケ 納屋事が
ねえてえのを無理に入へえろうと仕やアがると、此軍刀（サアベル）で斬つてやるぞ」

ト 轟かして軍刀を[redacted]振上げて、一たんは威張つたが、（銀紙張りなのを見られて）

（はとてきりに頭の上で振回はして居る。此間お紺は銀紙を見て青くなる。）

お紺「あッ その軍刀は[redacted]二人のお子を、お前が此所へ隠しれんる[redacted]のぢやア[redacted]！ それではよく」

銀公「何んだ[redacted]ッ」

ト 軍刀で云張り轟かさうとする。

お紺「銀紙張りの軍刀で轟かす奴があるもんか」

ト 嘲り取り、ドッ お紺は銀兵衛納屋に入り、銀兵衛は（打擲する）勝てぬの隙間を見て 手早く手拭を宝佐子を引抱へて出る。一隅に着付け。

銀公「それ如何だ、俺を酔え目に遭はせやあがつて、俺も此子を酔え目に遭はせてやらあ、俺の躰に一寸でも纏つて見ろ、直ぐ一息に絞め殺すぞ」

お紺「あッ そんな無理が有るもんか」

銀公「いや有るんだ、無理が通れば銀鑑の銀兵衛だ、ひッこんでは居れるもの、[redacted] 此は本郷人に見つかれては仕方がねえ、取れ返へ直ぐ返してやるべえから、警察へ知らせるか、それ今晩百両の内が一文、それを持つて来い、ギユッと一息に絞め殺すばかりだ」

お紺「あッ そんな事を……」

ト 縋りかゝる。

（七）

銀公「えッ　おれに一寸でも触らせねえ」

ト睨付ける。

下手より太掌を若山芳郎、銃猟服、二連銃を持ちて出来り、いきなり銃口を銀公に向ける。

若山「ふふッ　一寸でも動いて見ろ、蜂巣にしてやるぞッ」

銀公びっくりする。

銀公「わあッ」

ト声を揚げる隙間にお紺逃入る、
銀兵衛と富佐子との間に入る。
銀兵衛、ようやるぬと逃去ろうとする。
若山、銃の台尻で一ツなぐる、銀兵衛びっくりしてひきつつ上手に逃入るの若山、後より追ろ（同じく上手に入る。）
お紺急いで縛しめと猿轡とを解く。

お紺「お嬢様！」

富佐子「紺！」

お紺「~~お嬢様お帰りなさいまし~~　もう大丈夫で御座いますよ」

富佐子「紺チャンが来るを待ち居てよ」

お紺「あッ　それは早くお助け申しませう」

ト二人急いで納屋に入る。
上手より若山[illegible]雪江の息切らせを手を取って連れて来て。

若山「御安心なさいまし、とかくお嬢様は御無事ですよ」

雪江「まあお蔭で助かりまして難有う御座います。少しも早く逢いたい、無事なお顔が見たう御座います」

ト言ひつつ、四辺を見れど誰も居らぬ。二人再び驚

しそ捏ねんとする紙へ、下手よりお嶋走り出て、突当り吃驚して退かうとしても息が切れて口がきけぬ思入れ、頭は下げながら居る紙へ、挨拶するお紺、富佐子、菊丸（いま…）しめ、妹も解かれて居 走り出る

富佐子 阿母様！（山）
雪江 富佐子さん！（山）
菊丸 お嶋！（山）
お嶋 おばァちゃま。（山）

四人同時

ト富佐子は雪江、菊丸はお嶋に縋る。お紺は義山にお辞儀をして無言で禮意を表す。義山もなか／＼感じ思入。

田舎芝居、町廻りの太鼓遠く聞える。

（幕）

(1)

黒花

二幕目　『[redacted]』　笠原家の廣間

『時』　春の日（午後）

『處』　小石川竹早町笠原傳七郎内

『人物』

笠原夫人雪江（前出）
笠原令嬢京子（前出）
笠原令嬢富佐子（前出）
女中　お紺（前出）
若山　芳郎（前出）
深瀬　繁三（前出）
西郡夫人武子（三十三）
新坂夫人童子（二十八九）
半田霜子刀自（六十三）
令嬢支子
令嬢国子
令嬢保子
令嬢葉子
令嬢市子
令嬢柴子
小学生大松太郎
小学生中梅之次郎
小学生小竹三郎

『舞台』は日本室の廣間。[redacted] 上手

此所に、若山、深瀬、富佐子、令嬢六人、小学生三人、双方に分れて新式の歌留多の一勝負をして居る。上手の方まで西郡夫人、讀方に成って居る。半田の老隠居見物して居る。

幕明く。

二

武子「維とかも知る人にせむ高砂の松も昔の友、（ならなくに」）

並他何もよろしく、二三枚読む。皆そ指先まで、いき合ひ、昔の如く取組合などはせぬ。上の句[redacted]の二三字読むだけで「ハイ」と取り合ふと声をして早く[redacted]取る。

お紺「西郷の奥様、お元気で御在ます」

武子「あツ然うですか、ぢやア半田のおばア様、一寸お読みを頼みます」

ト急いで読札を渡して上手へ入る。お紺も従えて入る。

霜子「どれ／＼、わたくしに読めますか如何ですか。全体わたくし達の若い時分は、かるたはお正月と極つて居ますもの、桜の咲く時分に、（夏の暑い時分に）それが当節では又貴方がまあ不思議な時でもお取り遊ばします。（時世が違ひますねえ）当節では上の句ばかりで御在ますが、昔は下の句から読みましたものですね」

ト グド／＼言ひながら眼鏡をかけて

古松
保瀬「お早く願ひます」ト急立てる。

霜子「まあお待ちなさいましよ。読み馴れませんお札ですもの、むづかしふ御在ますわね」

ト札をひねくり廻し。

霜子「えゝ……うむ……あ……め……じ……」

武子「へえ、御在ましたわ」

三

霜子曰「ぬす……す……」

傳子曰「へえ、御座りますれ」

霜子曰「よろ……と……よ……ま……」

條子曰「へえ御座りますれ」

霜子曰「みや——まるで讀ありくのは如何して、そんなはお久りですか、あれ二度か三度しきゃ申上げない内は如何して、そんなは取りますかい」

喜子曰「居りますわ。それはおばア樣、此頭の人は、皆練習が積んで、ちやんと暗う記憶してありますので、あわドと云へば、……くよねぞめ、あわれと云へば、みの［illegible］いぬづくと、すツかり文札を吞込んで居ますから、それで早くので御座りますよ」

霜子曰「おや然うで御座りますか、わたくし達の若い時すはね、でかるだけでも二三度讀かへして頂いて、それでやッと取れんで御座りますよ」

美山曰「お早くいらか……」

霜子曰「はい……それでは讀みますよ」

窓瀬曰「取りますよ」トロ眞似をする。皆をドット笑ふ。

霜子曰「わたのはら……わたのはら……」ト讀みつまる

美山曰「わたのはらが二ツ有ります、どちらで有る」

喜子曰「○○のあてこぎでですか、やそのでですか」

霜子曰「さアどちらでせうねえ、わたのはら……」

寅佐曰「半田のおばア樣の讀方ではイヤよ！」ト言って札を皆かきちらしてしまふ。皆を笑ふ。

二

霜子曰 ［illegible］

四

霜子 曰 それでは おやくわれくし 深瀬さんは イケナイさんが 若山さんにお願ひし
それいわ
蝶子 曰 あら、お二人とも 随分あきらかね イケ……
深瀬 曰 男子の方が、すべて評判がわるいですなア
若山 曰 勝手つづけれので、それでいゝ
皆々 曰 それ よ
ト 此処へ 雪江 出来りて。
雪江 曰 ちょうど 好い処で御座ます。手紙の（アイスクリーム）が 御嬢様、あちらへ
下さいまし
霜子 曰 お手紙で しても ね
雪江 曰 冷めぬうち イケナイ……
ト ……早く どうぞ 上へ（彼方へ。然して）
こゝにあれ 御遠慮なさらぬあいだ
饒舌 御容色をお取り
喜子 曰 甘方が ね ですわ
若山 曰 それでは、皆ですわ。皆一緒に
園子 曰 おやア 御遠慮なく 何とて 若山さん
ト 皆を上手へ入る。
喜子 のこりて かかつて居るのを 片付けて居る。
ベルの音がするので 喜子 急いで 下手へ入る。
~~間もなく 新坂 …… 来る。~~
蓮子 曰 さアどうぞ 此方へ……
喜子 曰 お……
ト 二人 下手へ ……

喜子
……
……

⑦

喜子　[redacted]中へはお アイスクリーム
がお出ましたので すが[redacted]如何で御在ますか、直ぐと
あちらへ入らっしゃっては
重子　え、わたくしは、ちと胃（止め）をいためて居りますので……
[redacted]今日は御案内下さらなくッても、是非お伺ひ致す事なり
で御在ますもの
息子　何か御用でもお有りあそばすので？　姉様は
重子　え、あちらは……
喜子　あの、わたくしは…… ト[redacted]。
重子　あまり好いお話では御在ませんから、簡単に申上げますよ。其代り能く味はってお聞き遊ばせ
喜子　左様ですか…… ト
重子　[redacted]お姉様、西郡へ御縁附の武子様もお有りなさるし、又半田の御隠居様もお有りなんですから、わたくしが差出て申上げるのは甚だ心苦しいので御在ますが、御年寄の新宅の新坂とは民弟同様にして下さるので、それで御在ます
の監督をお托しなので御在ますが……
喜子　それは[redacted]成って居るッしゃるんですもの、気張り強く当て嫁さんの里親類同様[redacted]
思って居ります。どうか御遠慮なく仰有って下さい
重子　それでは新坂が参って申上げるのですが、[redacted]
いましたの女の方がよかろうと、それでわたくしが代理で参りましたの
です。それは、ですねえ、貴女の御方の縁振りを親てど

（六）

御存在すの

喜子　まあ交際？

重子　交際をなさるのは、無論結構でございますけれど、近頃チラと耳に入りましたのは、女同士でなく、男の方と能く御交際なさるですってね

喜子　……かしは……鶴子の……

重子　別して深瀬さんの兄さん、いえ、弟ですが、その鶴三さんとか云ふ方と、その鶴三とか云ふ方は、さて御親密だとか

喜子　ああ、然うではありません。あの方は妾が大学で貴女の後を追うて行かれたんですね

子息つてる御存知ないのです。

直き人は様子を知ってゐるのです

重子　然うでございませう、それが当然でございませうけれど、あの方は気を配って下さるといいと困ります。監督者の側

喜子　それでは 上手の障子の内より武子一寸顔を出し、心配で御存在すわ

結婚後の者は構はないので御存在すか

重子　然うでございます。男子と交際しては、イケない。

作法を顧みないのです。御存在すが、別して、

御存在すが、妾は何も申上げません。表立って亜郎の

異様な御相談をする、

煩はしいのです

喜子　いれくし、別る様、その御様子を御存じの和尚さん

導くと仰有るが、ト、ツンとして言ふ

重子　あきれます。

重子　いえ、然う仰有るのなら、もうそれで何も御存在ます、

妾がへりまして、新しく相談致して

参りますよ

喜子　然う成さつた方が宜しう御存在ませう

竜子曰　これは大[redacted]お邪魔を致しますれ止

喜子曰　あんの御学博士の御代りなんぞ[redacted]止

ト竜子[redacted]無言でおじぎをする。

喜子も無言でおじぎをする。

竜子曰　[redacted]

をする、二人気味合あり、睨み合ひの形にて

竜子下手へ去る。喜子も見送って居る。

上手より、廣子、霜子、を誘ひて出て来る。顔色て甚は今の様子に就て不満の意をすらす。

下手の方を見詰めて居る。

舞台へ下手より喜子帰り来り、二人の

立って居るを見て、わざと仰山に口惜し

泣きをして泣き伏す。

廣子、霜子、[redacted]叱りてなだめる。

廣子曰　まいるのですかしら。さぞお前は口惜しかつたらう

霜子曰　ねえ止　喜子さん[redacted]、安心しなさいよ

廣子曰　那須の[redacted]、本山のおばア様、喜子さんある偉いさん

此事は有りませんから止

廣子曰　われし能く言ひきかせて言ひませうかと思ひますれ。

新任夫人は何んです、浄瑠璃の女給仕を、紫京

家の後妻に入れるに就て、喜んで

仮親にて成って貰ふのは[redacted]ではありませんか。此様

は[redacted]今でこそ那須家の居る成って居ますが

紫京家の血統は喜とみんな父子が、喜子さんと

此三人がないのです。今の博士は養子です。[redacted]

[redacted]

その後家の仮親が何の権力があるのでせう止

八

霜子曰　全体お婆さんがあまりの仕打、あなたは
風[redacted]入の後でも[redacted]
傍が[redacted]喜久子さんを嫁入り縁へ[redacted]直[redacted]すが当り前
なんですもの[redacted]それを義子の身分だもの、よそ見
しかも給仕を入れて置いて、肝心の陰を親類の
私には[redacted]それの手前で、新坂さんまれのもらんて、おまけ
餘んまり馬鹿にして居るッて来る。だから今の様な
事が始まるのですよ。[redacted]博士は気がかきです
世間の者は何んとも仰しゃりませんわ

喜子曰　わたくしの事を[redacted]ゆるして……新坂さんへ告げ口したのは
雪江さんと掛合て居ります……それはね、先日お話し
仕様がないです、自分の[redacted]を隠しますよ、
わたくしの悪口をきっぱり言ってるんですわ

広子曰　言ってみれば何もかも戦争を挑んだのです。
だまって居る事は有りません

霜子曰　当り前ですわ今日此所で、裁判をお願いさ

広子曰　まあいいましょうよ

喜子曰　それでは然ういう様にしませう
わたくし、皆さんを後の方へ御案内して置
いて、雪江さんを此方へ喚んで参りますわ　会わせ

広子曰　それが宜い早くねえ

ト喜子は上手へ入る。広子と霜子と打合せをひそひそとして居る。
無断へ上手より雪江出来り。

九

雪江曰 何か御用で御座いますか

ト 下手な[illegible]。

広子曰 [redacted]喜助は用（ちよつぷ話）がないのですが、ちと太夫の[illegible]の訳ですが、お聞申して見たいのですよ

雪江曰 何るお話し申すけどの事ならば御座在ませんが、（女ばかりで）物騒で御座いますから、前々のやりかたで[illegible]

女中しを置きましたが、[redacted]（これが忠実な[illegible]）でございますので、（大分）大変りな御代りましたのね

霜子曰 それは大方へ伺いて参りましたが、あの黒[illegible]の女中ですね

雪江曰 湯場の女ですから、（能く）働いてくれますの

広子曰 お宅家庭で一番困りますが女中問題ですね
少し氣が利いた女中かと思ひますと、朝から晩まで
鏡と睨めくらで、顔にお白粉の壁を塗たくり、頭は
[illegible]をまげ去へれ、少し蒸い用もさせますと、
プッとふくれますね

霜子曰 然ういうと[redacted]云つて、[redacted]朝将のほいのは[redacted]
行儀も作法も[redacted]。洗掃をさせれば
四小鉢を割りますね、掃除をさせれば障子を
[redacted]割ります[redacted]、[redacted]マントルを
にこわすのは、[redacted]

広子曰 それで（男の）頭を張る、つまみ喰ひ致します。食氣が
あいと思ひますと無遠慮な[redacted]きましてこれがありますよ

（十）

霜子曰　それが無くって罪ですと思ひますもの、直き
嫁入〔下ります〕のきげんを直れば増長する。きびしく
云へば逃出しませう。叱りつけないでせうか、
今ニ 由ー子様をつけて呼んで、主人がお給仕をする様
にお勤めさせう。それとも私が悪いので御座
いますかねえ

ト離れ立てる孫が横路に入つたのをみてゝ
広子は目顔でしらせる。

広子曰　叱ね雪江さん、大京の別荘へは女ばかりよくふ
来てでしたが、差出さんも鉄線のかへりまで泊つて行
かれたさうでございますね

雪江曰　は、あの、元居りません。〔悪い奴で御在ます〕ますのでよ、騒ぎでよ

広子曰　御存ですし、一晩泊つて帰きましたよ
でも強い男先のめゆが居るんですもの、それなら
なぜ、[redacted]と思はれますが

雪江曰　いえ、泊つて帰いてゐる御在ますもん。世晩
強盗が〔入らうと致しまして〕

霜子曰　まア、それは、強盗が又ですって。[redacted]あれの
御親類ちゃ、そうでは御存知ませんか

雪江曰　如何でしたか、そんな事が御在ませう

霜子曰　でも警察では決して強盗の目的ではない、
男さんが若気の楽だからお許しをしましたけれども
〔人知れず〕
いふ事だ陰険だとか聞きましたよ

十一

雪江「それは然う申さないと譯が全く分りませんけど
清純ですもの」

慶子「然うでせうか？　率直でせうか？」

雪江「それでは彦が[redacted]十時のがれの際

[redacted]（この男と……」）

慶子「関係がお有りですか如何ですか、世間ではね知りませんよ、ですが、あなたがねえ、あ、しれ[redacted]

[redacted]様は存じられませう、あなたの方で忘れてゐても、先方で覚えてるのが（これは無いよ）隔りませんよ（私が多くあることを申すはそれのわけの有りますよ）

[redacted]が、あの草郎と、何か[redacted]関係が有ります様な……」

雪江「ですと[redacted]（へますいかれくし）」

ト　酷い事をいふと態と顔をが如くいふ

慶子「いえ、それはそんな事は有りませんでせうけど有つてね」

慶子「聞いてるんですか」

慶子「それはお有り（隠さなくてもいいさ）」

慶子「ですがねえ[redacted]（隠い関係は如何でもお知りませんが）、八幡町で、草郎の家境を憫れんで、人目のとどかない所に入つて、あの御手紙の仲立を、お小使を入れまし、おやんなさつたといふ事ですが」

雪江「そんな事が如何して御存じですの」

慶子「それなで隠さなくつてもよくつてです。雪江さん！　あなたはそれで非認なさるんですか」

雪江「それは八幡町で草郎から話しかけられたのは事実ですが、兵備事を申しますから。」

（打棄てて置場はなけれど……）

（十二）

鷹子「はい加様な事をおっしゃい……わたくしは後悔が有って言ひますのですよ」

雪に「それはどんな後悔がお有りなさってそ？」

鷹子「これですわ」　ト荷葉の巾着を出して示す

雪に「あッ　それは……[redacted]あゝそれでなく、それはわたくしが落しれので御在ます」

鷹子「落しれの？　へえ　それは仮紙でお落しなさったれのです」

雪に「その落しれ紙がわかります[redacted]しまう、直ぐに捨てれので御在ますが……何処で落しれのか……わかりません……」

ト此は上手より深瀬暮三　喜子と共に出来り、立ちどまる。

暮三「それは奥さん、おわかりますは秘ですよ。あの時は誰の方をお落しなさったれので、巾着はわかりて草部へおやんなさったれので……」

雪に「えッ」

喜子「あれが草部さんおやんなさる所を遠くで深瀬さんが見て居るっしゃったれのですよ」

深瀬「見れのは見れのですが、どんなお話が有ったれのか、それは私には聴えなかったれが、後で草部さんが暗黙に説明を聴かされて、のこらず秘密がわかった訳なんです」

蔦子　後の証拠[illegible][redacted]深瀬さんが御存知[illegible]

[illegible]（置）いれ御存知です。

義理有る兄様のおつれあい……[illegible]は不[illegible]

の、秘密は何が秘密なのです

有[redacted]

（今日まで[redacted]）隠して置きましたの

広子　わたしもチラと聴いて居ますけれど、[illegible]みれども、

が浄瑠朝の[illegible]に[illegible]と、ちらっとこたえて[redacted]

身操問題まで、全然雅子おのさい人を、家に入れたのが根本の間違いで居るので、責任者の

蔦子　手紙で鈴坂さんの方から、姉さん事をお言出し

に[redacted]なって見ると、わたしの方が知れて居られません

霜子　その草郎とかの話[redacted]ですと、蘇芳[illegible]のお[illegible]の

[illegible]は、あれのお[illegible]で[illegible]ければ[illegible]ないとか[redacted]

熱心のお[illegible]様が、一人も二人ではありつれさうですね

蔦子　草郎の口で[redacted]、忘れ様と云われて忘られる

聞ではないさうです

雪子　その草郎[redacted]が思い込んでのも何って居

ます。（目的は金銭では[illegible]ません）[illegible]は強盗かも知れませんが

一同　ト　[illegible]する。

雪子　わたくしの身分がいやしいので……[illegible]

の[illegible]わたくしですから……

は神聖[illegible]と[illegible]

龍茶 真直な奉公しましたのが（身縋り）あやまりで 皆んな仕ました。
あいに私共は居りましたが、（幸ひ博士の御）因縁を得ず
しれのですが、女
を深かけらしては……因果な身上で 皆んな仕舞ますに（幸が引掛りで、皆様のお縋に）

ト泣入る。

博子　つまり　それは不謹慎からですか。

喜子　不謹慎は無教育から……ト言ひ掛けて心づき。

喜子　起るもとを限りませんわ。

繁三　と、無教育――不謹慎――不貞操――斯う成る

ですなア。

香子　雪江さん　斯う成って来ますと 皆んなそれは、責任を考へて戴かんとなりませんければ成りません

まいねえ。

雪江　私は結婚しましたらよろしくはないでせう。

鹿子　博士の帰朝せられるまで 慎んで、謹慎して頂くのです

明くん

十五

雪江　如何致しませう……

廣子　竹之介の出は昔から紫檀なんです。お里へお引取なさいまし

雪江　あの里へ……

廣子　それしかありませんわ。あなたはそれだって阿呆の……はあなたですもの

雪江　これは新体の……を閉ぢて、……しましたわけで、どんなさいませうか。

……申しては昔からの身の明りの立て方なら、いくらも方法は在ります……

それは御免し下さいまし

廣子　それでは、法律の上では、主人の……言葉を……

あいとおっしゃるのですか……いえ、然うで御座います、ではありませんよ。道義上の問題ですよ

……これは法律問題

廣子　此所では素直にお断りの方が、あなたのお為と思ひますよ。年寄の云ふ事は間違ひはありませんよ

十六

ト此所へ下手より雪佐子とお絹と
出て来て、雪佐子は座にはすわりつき。

雪佐子曰 母様に、新橋へ行つてはイヤですよ。
お家に居て下さいな

お絹曰 姉さんの言ふ事は、わしすは ちつとも わかんねえよ
ト田舎言葉で言ふ。

鷲三曰 お前は今迄如何すつもんか

喜子曰 其処で水道の口でも捻つておいでよ

お絹曰 今ンねえのは御前さん達でえすよ。わしは
何も納も知つて居ますよ。大家の命の帰りに坐つれ
林様を途中の旦那で、半分を食べて居なすつたのも、
わたしは チヤンと見て居たよ

鷲三曰 雪崩ツ

お絹曰 旦那様と草郎の奴と、往んで翻堂で あらんか。
第一あの男の様子を見ても、くろいから あかるくは
わかりますよ。髪の伸びれのが

鷲三曰 台やくの ボロ壮士、フケだらけで、
男をつまんで逃げて居れアよ。洋場の めツかち女でさへ、
の事くのツて、お前様達は……(言葉を よしてくれ) お前が
知らねえよ

鷲三曰 今はあんな風(カラ)だが、昔はあれでダリヤを
操ーて、ボアーの若さをつれてくるよ

喜子曰 その ハイカラが あんなに 挑つれのも
結果は無為の

（十七）

廣子曰　先ず甲斐の当家をお亡ぼしなさい。

霜子曰　博士の帰つて来られましたら、里へあがりますが穏当ですよね。

廣子曰　然し宗家の親族を代表すれば、当家から此れは

廣子が、キッパリ言渡すのです。

雪江曰　貴方も背に在りましても……引取りますると博士はお姉さま

ト身をふるはせて泣伏す。

宮依子曰　それでは山てしも母様と……

ト寄縋る。雪江に取抱へて泣く。

廣子曰　いゝえ、宮依子さんは行く事は成りません。宮依子さんの本統の阿母様は、此方の仏壇に入らっしゃる……その母様は成仏な母様でなくなるかも知れませんよ。

霜子曰　宮依子さんは此方に今らっしゃれば、実家の新母様の幸が此方に望んで入らっしゃるんですから、さびしい田舎へ行くのはありませんよ。

宮依子曰　いゝえ、これが宮の母様よ、なつかしい、可愛がって下さる母様はこちらよ。

雪江曰　それ程までに……

ト宮依子は感涙のむせび入る。
上手の方にて宮の太鼓の鳴声する。皆も吃驚して取りつくろふ。

（幕）

（一）

黒船

三幕目　六郷土手

○時　春（夏）の日。（午後）
○處　六郷土手の川の北岸。
○人物
男髪結　弓雄（四十二三）
同　舎息　菜丸
女中　お絹
陸蒸気鉄道人足
新場
自働車運転手
花見の男甲
花見の女
同　乙
同　一
同　二
同　三
同　四
同　イ
同　ロ
田舎娘

○舞台
本舞台は土手の向ふ六郷川を越して（田舎の景。）
此舞台は土手下の坂の上の花の咲く里の遠く流行唄の三味線。ヨカく飴の声など聞える。
幕明く。
花見の男、甲乙、花見の女
三四、酒樽、三味線、毛氈
男甲
男乙
南田

二

[illegible]の月並だ。斯うして[illegible]郷土へ[illegible]

[illegible]桃[illegible]の花が[illegible]

手で[illegible]つてるんだ[illegible]何処でも[illegible]

女一　[illegible]氣々入つた処へ店を[illegible]て、お雛様は直ぐ[illegible]わ

女二　それでお茶代々雛数[illegible]（一葉）

女三　それで道具をかついで歩くんだから、お膳が空いても

女四　色氣を[illegible]れて[illegible]

男甲　あの、桃畑の蔭へ行つても、一さはぎ[illegible]

女[illegible]

男乙　それが[illegible]

下手を[illegible]上手より[illegible]上手に入る。

[illegible]

娘イ　[illegible]

娘ロ　[illegible]

娘ハ　[illegible]

[illegible]がねえ

娘イ　[illegible]

娘ロ　[illegible]

娘ハ　[illegible]

下[illegible]し[illegible]下手に入る。

風の音。

さきの[illegible]の女が[illegible]

好き頃[illegible]下手より、宮[illegible]子、[illegible]

[illegible]

宮[illegible]　結[illegible]母様のお[illegible]は[illegible]のかい

お紺　何処で[illegible]橋といふ処は[illegible]さうです。

（三）

動男は動林…… 動ヶ橋しくる処は聴いれ様より有ろしけれど川の向ふは神奈川縣、能く知る遠いといふ事です。~~先きへ~~行くと渡し場が有るさうですから、それを渡ると向地で、きいて見ると分りませう 止

宮佐子　まァ、わたし、くたびれちやつて、歩けないわ 止

お紺　然うで御座いますとも、さぞおくたびれで御座いませう、さうでせうとも。言んな遠くまで歩いて探さうとは、全く思つて居りませんでしたもの。まア一体どうしませう 止

ト捨石に二人腰を掛ける。

宮佐子　でもねえ、母様にお~~逢ひすん~~ぢやうは、いくらくたびれても、わたし、行くわ 止

お紺　あの、いくらくたびれても…… 止

宮佐子　びつこ引いても、わたし行きますわ。然うしたら母様はお笑ひなさるかも知れないわねえ 止

お紺　何んでお笑ひなさいませう。嬉し泣きに……お、お泣きなさいませう 止

宮佐子　然うしたら、わたしも泣くわ 止

お紺　おう…… 止

宮佐子　母様が家に入らつしやらないと、わたし、心細いのよ 止

お紺　おう…… 止

宮佐子　皆んな家のもの母様をいぢめ出して了つたんだもの。わたし一緒に行かうとしたら、お母様が[illegible]を持つて（手を示し）邪見に突放して、痛かつたわ 止

お紺　あなたの前では真実のお母様ではありませんが、今の母様は成さぬ中でゐらつしやるが、それをあなたは家の者まで成さつて、盛に様をお慕ひなさる。それ程までにはいゝのですが 止

宮佐子　可愛がつて下さるんだもの。わたし、お母様なんか厭な事……今の母様が一番好いのよ 止

お紺　人情でございますねえ

ト深く感じ入る。

④

[illegible]（上手より自働車にて[illegible]男爵は、
菊次郎来る。
二人は立上りて迎へる。
菊次は二人を見て

菊次郎 やア。
ト声を掛け、なつかしさうに。自働車を停める。
菊次郎下りて二人に挨拶する。
傍より男爵も下りる。

菊次郎 阿父様、この方、東京で一緒にしばらく[illegible]のよ。それから此の人が僕を救つて呉れたのです。

男爵 あゝ然うだつたか。これは珍らしい処を逢ひ[illegible]。れの上総の方では、倅が危い処を救つて呉れて……や、

感謝します。[illegible]者が気の利かぬ者ばかりで、倅で聴けば、禮も[illegible]ずに、すめて、東京へ帰らうとろつて……いづれ改めて此方から禮に行くつもりであつたが、それではお前は此方へ出て来て[illegible]ちやんの家にでも居るのかね。

お絹 はい、東京で暮らしたで、[illegible]様へ用事いふ……

男爵 今日も[illegible]見えたかな。肉の親なれは直ぐ[illegible]所だから、宿つて行つてはどうかね。

（今日から 六四の見物）

お絹 いえ 折角見物では[illegible]、此のお子の阿母様が、お里へ帰つて居るかもしれぬので、おれは[illegible]

男爵 [illegible]存ます

男爵 ふむ……

吉作 [illegible]をば、どちらでもせうねえ

男爵 [illegible]……それは[illegible]、[illegible]様の[illegible]子様が大変好きであがる紀念をさしあげません、それは……[illegible]……[illegible] あの迎ひに成つて居ませうから

菊次郎 自働車で送つて上げると
ト上手の方を指示す。

東田氏 [redacted]
すっかり……話し合ふ。
二人は話し合ふ。

(五)
男爵 それ[redacted]は道が不完全で通れませんよ。いくら文明の利器を輸入しても、(それは麻よ)設備が皆無だからな。明治時代とは云ひながら、一寸都会を離れて見ると、まだまだ日本は
[illegible]だよ 山
お紺 [redacted]おかげさまで見当がつきました。これから少しでも早く参りませう。
ありがたう 皆さん左様なら 山
ト 宮俊と共に礼をして行きかゝる。
男爵 あゝ一寸待って下さいませ 山
お紺 御用ですか…… 山
男爵 やゝ話が一寸……聴いてくれるかな…… 山
ト 思ひありて気を変へ。
男爵 ~~いや、お嬢様は~~ や、話に聞いた古[redacted]を
の……地所の事でお前にいわねばならない事がある。別荘
建てたいと思ふので、土地を買入れたいと思ふが…… 山
ト 暫く間あって
男爵 お前あの(金田)の桃林で、古墳[redacted]子を取る そして遊んで
居れば、お嬢様と一緒に運動をさせて、見物に
行っておいで……地面の話などは面白くないからね…… 山
草丸 あれは(田)といの、嬢ちゃん 直き見物です、一寸見本に
きますから 山
宮俊 然う……では行って見ませう 山
男爵 市東……つい其所です。あ、あそこで下さいまし(此所から見えて居るでせう) 山
ト 三人上手に入る。
お紺 鰡の干場や船の置場ぢゃ、大勢知って居りますの、
地面の方は、~~[illegible]~~ 知りませんよ 山
男爵 いや、お前に或る地面の話だが 山
ト 揚石にかけるの。お紺もかける。

（六）

里枝　お前の阿母さんは、たしかお絹と云つたさうだね。

お絹　然うでございます、阿母の方なら、ちつとは地面の話が出来ませう。

里枝　其の母がお前を助けられ、その以前の名はお絹と云ひ、母親はお絹といふ……それから聞いて居りますが、纏まる行かずに帰つてあれのは家持たぬ女が多いが、わかれので…… 近くはわたしが行くつもりであるが、阿母さんはわたしは会つて居られるかしら。

お絹　随分地面を周旋して儲けた人は有りましたけれど、家の阿母さんはそんな商売がきらひでございましたもの。

里枝　流石お前の阿民さんは……

お絹　阿民さんは有りません。

里枝　お親が無いの？

お絹　鰯の浜山取られた時、沖から打上げられたんです。鰯の大漁でも情けませんよ。

里枝　や、面白い事を云ふなア。儲し人間の親といふ事は無いの、東京へ奉公に来て居る時は、良人でも持つたのでは無いか。

お絹　気の毒い事は知りませんが、何んでも位の有る方です、阿母さん許りを皆な可愛がつて、今では知らない顔をされて居るさうなんださうです。（はたして自分は明り好いと思へ）（お前は それ）

里枝　その人が名を知つて居るか。すると探りを入れるの。

お絹　聞へば阿母も教へるでせうが、聞いた処で如何しますの。膝の中のめんくしも、闇から闇へ出るやうな、すべめれ人ならば何しませう。十七年の其間、酷い浮世を阿母も見せてゐる人に、それが幸福様か何んだかう

⑦

誰か邪魔されいませんか。あなたの前で泣かれますが、全く酔う事なんてさアねえ」

男爵「そんな不■像な人が、我々同族の間に有ろうとすれば、空ろな悲しい話だが、何かそれは秘密もあろう。幸福があろう。その事情が判明したら、打明けられぬかな、お前は其の親に面へ寄して、問い寄られるか」

（華族の家は）

ト思ひ入る。

お絹「ええ…」

ト少しく躊躇を生じる。

男爵「漁村生活から一躍して、貴族の家庭に入る気はないか」

お絹「いいえ、十七年かかって打ちあけようとして、（お絹 ト躊躇せず打明けるのも… どんな事情が有ろうとても、何処の家にも知らぬ顔を…）そんな事情がそれに入ツれて、有るまいが、お父アさん！長い間の阿母の苦労、ここ阿母が泣いてればけの苦しい日を、女一人で見せなければ、腹が減るほど痛えすわねえ」

男爵「では、ゆるしてやる気はないかね」

お絹「そんな立派な身分の親なら、~~女郎で中毛布を着~~ カモヤの綿を被って、綿のこぼれを拾ふ、猶更ふんわりとして見せますわ」

男爵「すると、お前は母親の為に、父を敵とするのかね」

お絹「言ってみれば敵ですわねえ」

男爵「然し、~~言われ…~~ ふお前の心が、先方へ通じれば、十七年の間、お前を抱へて苦労をされ、母親以上の苦しみをし、

九

主人は賤しくて居るであらう。若い時に作つた罪悪。それが年を取るに従つて、段々と自覚されて、良心ある者である苦痛といふものは、恐らく非常なものだと私は想像する。（名誉をきつい地位を持つは）すべての犠牲をする。ねて、あらゆる犠牲を捧げられた上で、地位を保ち得たとして、（流転の）人生を味はつたと、僅かなほんの真の愛が……世界の何のれが、華族に居つてゐると、耐え難い苦痛を感ずる

のだ　山

ト　煩悶の状態。

お紺　自業自得で御什方がない　山

ト　お紺泣崩の態で居る。

雪枝　此所へ　雷住家の手を引き雪に走つて

出て来る。

雪枝　おゝ、お紺……　山

お紺　奥様……　山

ト　縋りつく。

おくれて、新坊主人、世界内、運転手

秀枝　東京へ帰るのは帰つてもいゝ（里へ行つて御嬢様と西日本……）、神田の川端

出て来る。

思ひ出す様な様子で居れば、新坊の

亀子　奥様が入らつしやつて……　山

倅　（お紺）だ……の気持も家の人は

恋する人が帰られた。おばあさんで、私が……ました。

おつれもして帰る……と……　山

富佐子「わたし、一番子供をめッけたのよ」

雪江「でも、思ひがけないので、びッくりして言葉はでませんでした。で、涙が先でしたわ」

富佐子「嬉しくッて泣いちゃったの」

お絹「成さぬ中でも可愛がれば、親身も及ばぬ間に成る。現在血をわけた子です……[illegible]の親は、何んで情愛が出ますべえ。闇から闇へやるよりは、母親を苦しめれ」

雪江「絹も、いろいろ苦労をかけたが……当分お前も一緒によねえ」

年子「わたしの家へ来ておくれ……」

お絹「ええ、わたしは、もう帰りませう。[redacted]上総の小湊へ帰りますよ。東京は気張りおッかない処でした」

男爵「地所が確定して御本邸を新築したら、お絹母子の様な苦労をした人を、女郎に永久住はせない」

お絹「わたしもいやながら、河岸の女郎に[illegible]とは言ひますまい。こんな東京の人が帰る訳が無いですよ」

男爵「いや、東京の人は永久行かぬ覚悟である」

(十)

葉丸曰　阿母様、帰りませう」

お紺曰　われも山荘へ帰ります。阿母が一人さびしがつて、

（山荘の帰りを）待て居べきよ」

冨佐子、お紺の傍に行き、不審さうに顔を見る。

雪丸、庭子とさゝやく。

男爵、煩悶の状にて自像する。

ふらふらとしてよろめく。葉丸、びつくりしてさゝへる。

~~男爵は……。ラッパを鳴らします。~~

お紺は勝利の顔色。

（芸終）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

(十)